令和8年度　兵庫県委託事業　在宅医療における多職種連携による食支援体制整備事業
（公社）兵庫県栄養士会

「在宅療養を支える“食”のバトン」

～病院管理栄養士から地域管理栄養士への連携実践報告～

～余命数週間から8カ月、自宅での穏やかな時間を支えた“食べる”支援～

症例概要

最後まで自分の食べたいものを、口から食べたい！

■患者情報

・年齢・性別・主な疾患：73歳・男性、脳幹梗塞後遺症、嚥下障害、高血圧

・経過：2度の脳梗塞を発症し、誤嚥性肺炎を繰り返している。経口摂取は困難となり、主治医より胃瘻造設による経管栄養が提案されたが、本人・家族ともに強く拒否。

■栄養支援の経過

・摂食状況：ピューレやペースト状の食事も視覚的に拒否し、摂食拒否がみられた。

・対応：言語聴覚士と連携し、摂食時の姿勢を調整。窒息リスクについて家族へ丁寧に説明し、細かく刻んだ食材にトロミ剤を使用し、ばらけにくい形態での摂取を試みた。

・診断と方針：余命数週間と診断されたが、ご家族の強い希望により在宅療養を選択し、退院。



■管理栄養士の関わり

・退院直後：病院の管理栄養士が訪問し、食事形態の調整と継続的な栄養食事指導を実施。

・その後の支援：ご家族の不安が軽減し、状態が安定した段階で、兵庫県栄養ケア・ステーションから派遣された管理栄養士に業務を引き継ぎ、訪問栄養食事指導を継続。食事形態が安定した時点で訪問は卒業。

介入の効果



命の時間を、ふたりで過ごす
42年の結婚記念日と誕生日

余命数週間もつかどうかという厳しい状況での退院でしたが、経口摂取が継続できたこと、そして比較的安定した状態を保てたことで、8カ月間の在宅療養生活を送ることができました。
懸命な妻の献身的な介護もあり、在宅療養7カ月目には、夫婦の結婚42周年とその翌週には、ご本人の74歳の誕生日を迎えることができました。
2月中旬には、学会でこの症例を発表させていただくことをお伝えしていましたが、その発表が終わった直後、訪問看護より「下顎呼吸になった」との連絡が入りました。
まるで私たちの発表を待っていてくれたかのように、
その2日後、ご逝去されました。

ご家族と多職種の声



”食べたい”を支える・・・
“支える人”の心にも寄り添う

■家族の声：「ずいぶん昔に聞いた指導内容を自己流で続けていたが、今の状態に合った食事について教えてもらえて本当に助かりました。」「看取りの時期になると、他の職種の方々からは急変時の対応や“最期”に関する話が多く、精神的にとてもつらく感じていました。そんな中、**管理栄養士さんが“食べること”について前向きに関わってくださったことが、私にとっては本当にありがたく、大きな励みになりました。おかげで、もう少し頑張ろうと思えました。」**

■訪問看護師の声：ご逝去後、ご家族に「介護で一番大変だったことは何でしたか？」とお尋ねしたところ、**『食事が一番大変でした』**というお返事がありました。だからこそ、訪問栄養指導で管理栄養士さんが介入してくれたことは、本当にありがたかったと思います。」

まとめと提案

この症例は、訪問栄養食事指導が患者のQOLを支えるだけでなく、ご家族の心の支えにもなり、多職種連携の質を高めることができた好事例です。“食支援”は、単なる栄養摂取ではなく、命の終わりを待つ時間ではなく、“生きる”時間を支える力であることを、改めて実感しました。
今後、地域医療においては、医師や看護職等と連携した訪問栄養食事指導の導入を積極的に進めていくことが、患者・家族双方のQOL向上に大きく寄与すると考えられます。

兵庫県栄養士会栄養ケア・ステーション　TEL 078-251-5311